

高校生視点から見た復興の定義 ～飯舘村における実地研修の影響～

栃木県立大田原高校 SSC自然科学班 後藤 敦哉 相田 稜太 白井 修人

1. 活動の動機

栃木県立大田原高等学校の「飯舘村実地研修」に参加し、現地で復興に向けたさまざまな取り組みを学び、多くの考えに触れることができた。その中で、復興の捉え方が立場や環境によって異なることを実感し、高校生として復興を自分事として考えることの重要性を強く感じた。しかし、研修に参加していない高校生はどのように復興を捉えているのか疑問を抱いた。そこで、本研究では、研修に参加した高校生（以下、参加者）と参加したことがない高校生（以下、未参加者）が考える「復興」の定義を比較し、その違いや共通点を明らかにすることで、現地での体験が復興意識に与える影響を考察する。

- 【飯舘村実地研修】 2019年度から、毎年秋に福島県相馬郡飯舘村を訪問し、復興への歩みや放射線、農業IoTや関連技術を現地で学ぶ研修。
- 9月回（9月21日～22日）
- ・参加者 生徒50名（栃木県立大田原高等学校、福島県立安積高等学校、福島県立白河高等学校）、教員 7名、大学院生・大学生3名
 - ・研修 交流事業①：飯舘村（飯舘村長泥地区環境再生事業、図図倉庫）見学
交流事業②：放射能濃度測定、埋設土壌の放射線量測定、堆肥作り体験、動物モニタリングカメラの設定体験
交流事業③：ドロえもんクイズ大会・取組紹介など
交流事業④：復興ディスカッション「テーマ：復興に向けて自分たちができること」
- 10月回（10月26日）
- ・参加者 生徒15名（栃木県立大田原高等学校、大田原女子高等学校）、教員3名
 - ・研修 東日本大震災・原子力災害伝承館、飯舘村長泥地区環境再生事業エリア見学
ディスカッション「テーマ：『復興を考えよう』～復興のためにできることは何か？～」



図1 2024年度飯舘村実地研修集合写真

2. 研究手法

本研究では、飯舘村実地研修で実施された復興に関するグループディスカッションのワークシートと、本校の1～3年生を対象に実施したWEBアンケートの自由記述回答を分析した。グループディスカッションでは、4名1グループで話し合い、9月回は11グループ、10月回は4グループが復興に関するキーワードを付箋に記入し、意見を共有しながら復興の定義を考えた。これらの付箋の内容をテキスト化し、WEBアンケートの自由記述回答とともに、テキストマイニングソフトウェア「KH Coder」を用いて対応分析を実施した。これにより、研修参加の有無による復興の捉え方の違いや共通点を明らかにする。

3. 飯舘村実地研修参加者と未参加者の復興の定義の比較

（1）9月回参加者と未参加者の比較

参加者間であげられた言葉を比較すると、9月回参加者と未参加者で顕著な違いが見られた。9月回参加者では「発展」「自立」「コミュニティ」「活気」「生活」など、新たな町の建物や人間関係の構築に関連する言葉が多くあげられた。一方、未参加者では「元通り」「暮らせる」「前」「戻す」など、以前の町を取り戻すことに関連する言葉が多く見受けられた。この結果から、9月回参加者は新しい環境づくりに積極的である一方、未参加者は復旧や再生を重視していることが明らかとなった。

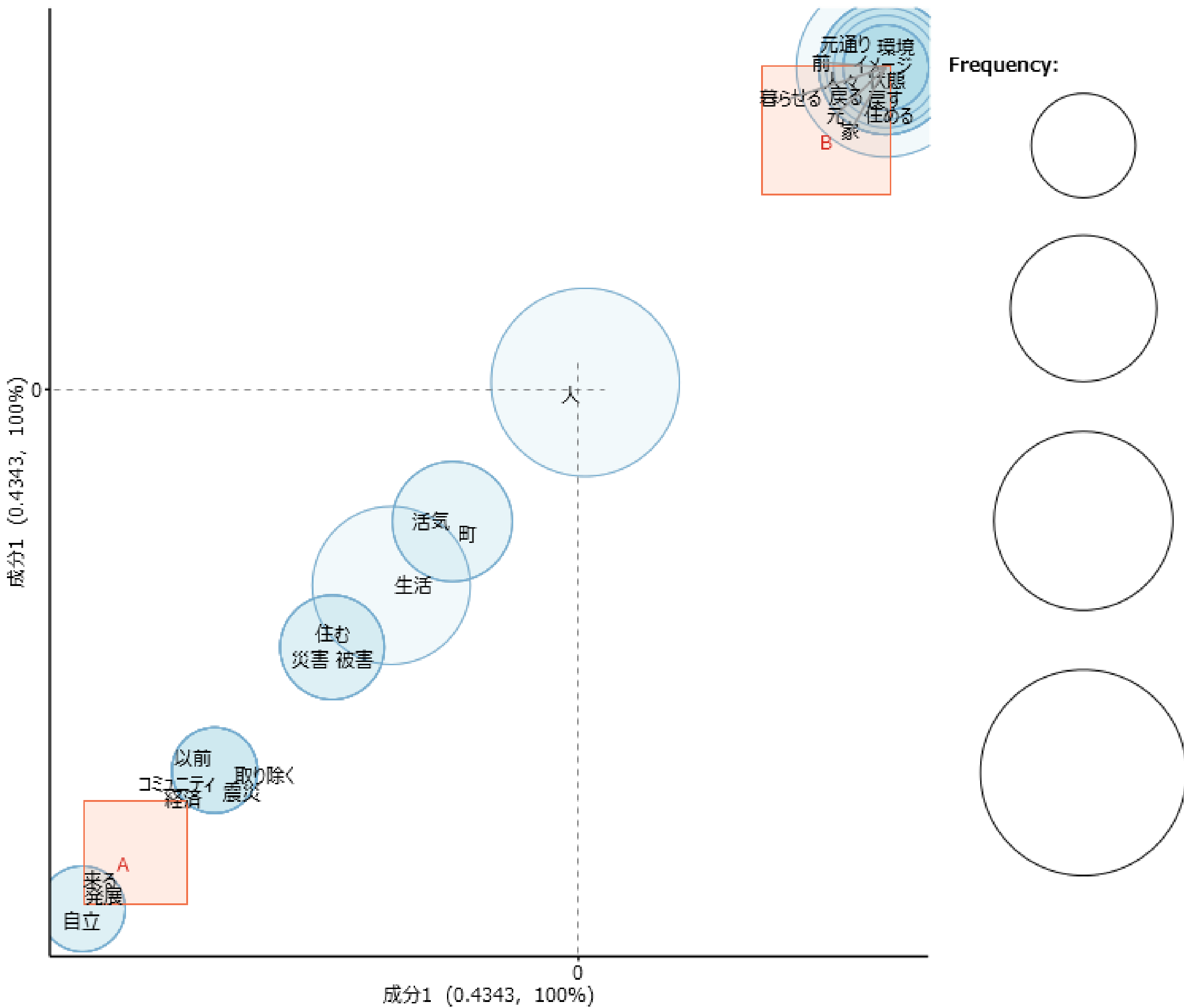


図2 飯舘村実地研修9月回参加者と未参加者の比較

（2）10月回参加者と未参加者の比較

（1）と同様に比較すると、10月回参加者と未参加者とは、ほぼ差異が見られなかった。9月回参加者とは異なり、10月回参加者は未参加者と同様に震災前に戻すような言葉が多く見受けられた。ただし、10月回参加者の意見には、9月回と同様に新しい創造に関する意見も含まれていたが、10月回参加者であげられた「対策」「事故」「笑顔」などのキーワードは、新たに創造する思考や、震災前に戻すことへの思考のどちらにも顕著な偏りは見られなかった。

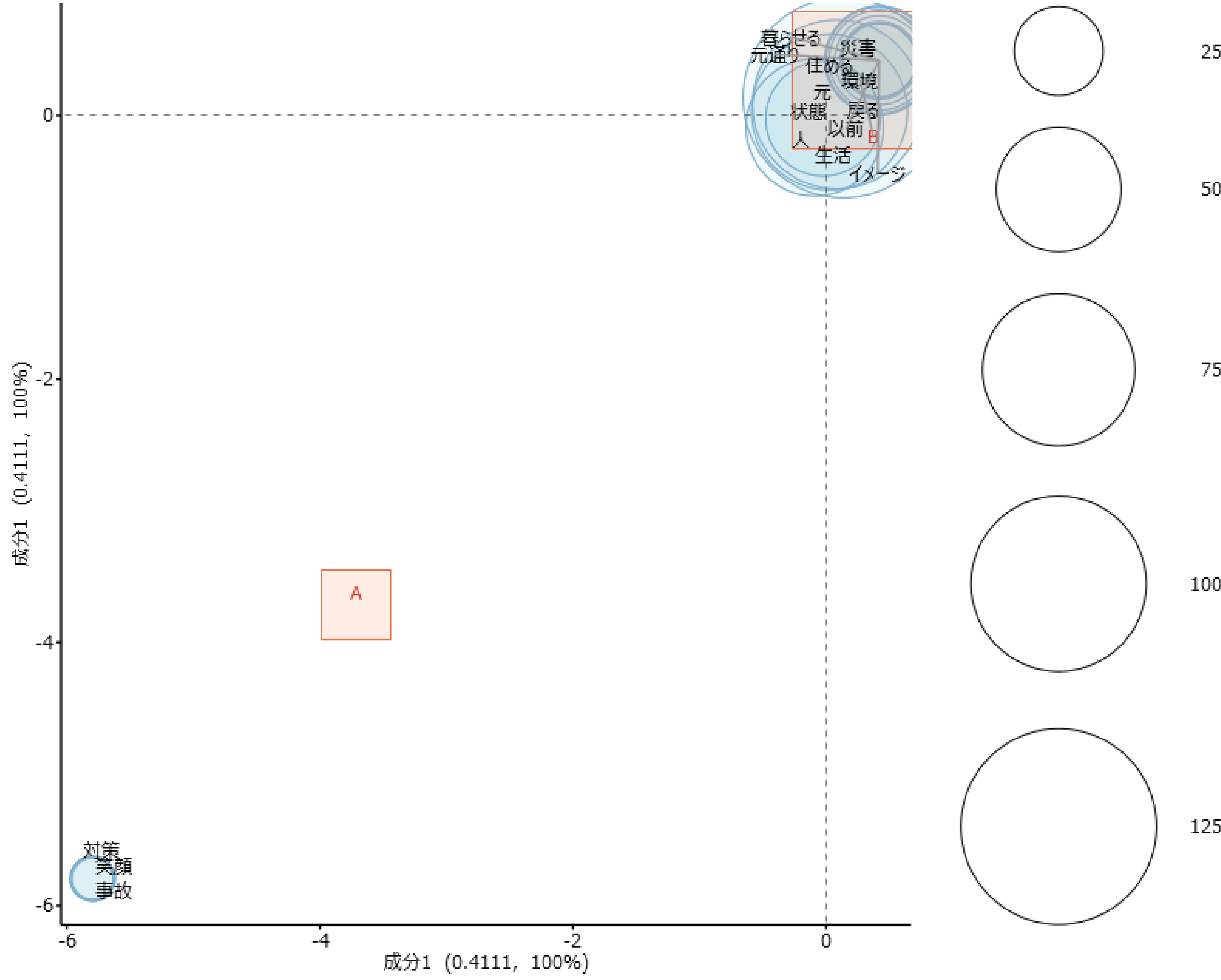


図3 飯舘村実地研修10月回参加者と未参加者の比較

※グラフ内の赤いボックス「A」は本研修参加者を、「B」は未参加者を表し、原点から「A」や「B」の方向に進むほど、該当するグループでその言葉が多く使われたことを示している。円の大きさは、その言葉が総合的にどれだけ使われたかを表しており、円が大きいほど使用頻度が高いことを示している。

4. 考察

本研究では、「復興とは何か」に対する考え方を、飯舘村実地研修の9月回参加者、10月回参加者、未参加者で比較した。その結果、復興に対するイメージに違いが見られた。9月回参加者は、実際に被災地を見学し、現地での体験を通じて、「震災前に戻す」よりも「新しくまち（村）を創造する」という未来志向の考えを持つ傾向が強かった。10月回参加者においても「新しく創造する」という意見は見られたが、「震災前に戻す」という復旧志向の考えが比較的多く、9月回参加者ほど未来志向は顕著ではなかった。一方、未参加者は「震災前に戻す」という言葉が多く、過去の状態への回帰を重視する傾向が強かった。

この違いが生じた理由として、研修への参加を通じて、地域の復興活動や国の事業を直接見たことが影響していると考えられる。特に9月回参加者は、新しいまちづくりや地域住民・外部との連携による復興の現状を体験し、その影響を受けて復興のイメージが変化したと推察される。また、10月回参加者も一定の変化は見られたが、9月回参加者ほど未来志向の意識が強くなかった。これは、研修の内容や体験時間の違いが影響している可能性があり、より多くの体験を積むことで復興に対する認識がより深まることが示唆された。

- 【高校生が考える復興とは（9月回抜粋）】
- 「震災の事実を教訓と残しつつ、新しい印象を創り出すこと」
 - 「住民の心や生活を再構築し、新たなメソッドで住みやすい町へと発展していくこと」
 - 「過去の歴史と今の正しい現状を知ってもらうこと」



図4 復興ディスカッションの様子

5. 謝辞

東京大学大学院農学生命科学研究科教授 溝口勝 氏、認定NPO法人ふくしま再生の会 田尾陽一 氏、菅野宗夫 氏、小原壮二 氏、佐野隆章 氏、北原高次 氏、内田理 氏、合同会社 MARBLING 矢野淳 氏、環境省福島地方環境事務所 荒井政章 氏、齊藤まどか 氏、矢野光章 氏、株式会社コムテック地域工学研究所 小浦洋生 氏、秋月俊五 氏、東京大学大学院 畑山太陽 氏、東京大学 鈴木健 氏、池田康成 氏には、現地での各種体験や施設見学などの指導助言で多大なるご協力をいただいた。また、福島県立安積高等学校、福島県立白河高等学校、栃木県立大田原女子高等学校の参加いただいた生徒の皆さんとは飯舘村現地で各種体験やディスカッションを共に実施することができた。ここに謝意を表す。